

1日目 猛練習後・秘密の家到着と汗だくプレイの始まり

8月の猛暑日。校庭での猛練習と練習試合を終えた菜々葉は、両親に「伝えたけど、これから合宿遠征に行くね。3日間くらい帰らないよ」と電話で話した。電話を切ると、彼女は悠太に向かって甘く微笑んだ。

悠太の家に着いた菜々葉は、汗だくのユニフォーム姿のまま2階和室に入った。エアコンがあるのに、菜々葉はスイッチに手を伸ばさず提案した。

「先生……エアコン、つけないでやってみようよ♡ 蒸し暑いまま、私の汗を濃く熟成させて、変態プレイたっぷり楽しもう？ 菜々葉、先生のためなら合宿の嘘だってつくよ。大好きだから、何でもする♡」

部屋はすぐに蒸し暑くなり、猛練習後の新鮮な汗の匂いが広がった。Aカップの小ぶりの胸がユニフォームに張り付き、大きくプリプリとしたお尻が汗でテカテカ光っている。

菜々葉はまずユニフォームの裾をぎゅっと絞り、新鮮な練習汗を悠太の口に流し込んだ。

「ほら、先生……1日目の汗、ゴクゴク飲んで♡ 大きなお尻の部分も絞ってあげるね」

次に菜々葉はスパイクを脱ぎ、汗でびっしょり湿った白いソックスを悠太の鼻先に近づけた。

「先生、足の臭いも嗅がせてあげる♡ 練習後のソックス越しでどう？」

ソックス越しに、塩辛く甘酸っぱい足の汗臭がふわりと広がる。バレーで長時間動いた足の蒸れた匂い——チーズのようなまろやかさと酸っぱさが混ざった刺激臭。悠太が鼻を押しつけ深く吸い込むと、菜々葉はくすくす笑いながら足を顔に軽く押しつけた。

相互飲尿をすぐに開始。菜々葉は悠太の口に尿を勢いよく放ち、悠太も菜々葉の口に熱い尿を注いだ。互いにゴクゴク飲み干し合う。

菜々葉は積極的に悠太のチンポを咥え始めた。汗でぬるぬるの口内で喉奥まで咥え込み、1回目の射精を口内に受け止めた。

クンニへ移ると、悠太の舌が菜々葉の新鮮なマンコを激しく舐め回す。

菜々葉は大きなお尻を振りながら喘ぎ、

「あんっ……先生の舌、すごい……あぁっ、来る……潮吹いちゃう！」

熱い潮が悠太の顔に勢いよく噴き出し、ユニフォームをさらに濡らした。